

グリードとノイズとシ
ンフォギア

キングタケノコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グリードたちがシンフォギアの世界にやつてきた。
一部タグは念の為。

目 次

歌とメダルと響く少女	———	
ヤミーとノイズと戦う者	———	
宣言と秘密と鉢合わせ	———	
ガラとバースと合わせ技	———	
流れ星とネフシュタンと新ヤミー	———	
43		
裏切りと奏と一枚のメダル	———	
秘密といったずらと隠し事	———	
ご報告	———	
今後の方針 ※ネタバレを含みます	———	
75		
現行1 グリードとノイズと再始動		
71 61 55		

第11話 78

歌とメダルと響く少女

「生きるのを諦めるな！」

天羽奏は背後で倒れている少女に向かつて叫ぶ。

すでに奏の体は限界に近い。そのうえノイズと呼ばれる謎の災害による攻撃を防ぐことに精一杯で少女に駆け寄ることさえできない。

パートナーは離れた場所で戦っていてとてもこちらへ手を回せる状況ではない。
(アレをやるしかない。覚悟を、決めろ!)

絶唱。

それは己の生命を削る究極の攻撃。

奏は理解していた。

自分に相棒、風鳴翼のような才能はない。多分死ぬだろう。生きるのを諦めるわけじゃない。

翼がきつと私とともに生きてくれる。

そう思つた。

だからこそ。だからこそ歌うのだ。

しかし、絶唱は唄われなかつた。

奏と背後の少女に向けた攻撃は何かに阻まれ、その瞬間は静寂のようにも感じられた。

人型ではある。しかし人ではない何か。そして大量の魚のような怪物。怪物のような魚かもしれない何か。

それらがノイズの攻撃をことごとく受け止めていた。

「やつぱり。アイドルはいいわ。効率が他とは比べ物にならない」

魚の怪物にノイズがぶつかると両者が碎け炭と銀色のメダルが飛び散る。メダルは人型の何かに吸い込まれるように集まつていきソレの体を作れる。

「お前は、？」

「あなた達、気に入つたわ。今日は助けてあげる」

人型の何かは手をゆつくりとノイズの群れの方に向ける。直後、その指先から水のような液体を放出し、ノイズを一瞬のうちに殲滅した。

「止まれ！」

風鳴翼は駆けつける。そしてその剣を向ける。

新たに現れた謎の存在。奏が危ない。そんな思いが翼の足を動かした。

「なあに？ 折角集まつたメダルをガメル達にも分けてあげなきやいけないのに」「お前は何者だ！ 目的はなんだ！ 返答によつては、：：斬る！」

「まあ怖い。助けてあげただけじゃない」

現状のみを鑑みるにそれは事実。しかしあり得ない。あり得てはいけない。シンフォギア装者でもない、それでいてノイズと敵対する、それどころかノイズを打倒してしまうなんて。

ノイズはシンフォギアを使わなければ倒すことはできない。通常兵器では触れることがでできないのだ。それをこの怪人はいとも容易く排除した。敵か味方か分からぬいうちは警戒するより他にない。

「質問に答えろ！」

声が響く。轟く。破壊されたスタジアム中が轟きに包まれる。

それは翼の声ではなかつた。翼にしては、音が、重い。あまりに重い。

まるで、：：、そう、サイやゴリラ、はたまたゾウ。そんな動物たちが大地を駆けるよう

に重い。

「・・・ウウルウ！」

雄叫びだろうか。咆哮と呼ぶべきだろうか。

「・・ズウウルウウウ!!」

ソレは近づいてくる。サバンナに太陽が昇るように。遠くから、ゆっくりと、力強く。
「あら、お迎えが来たみたい。じゃあね、素敵なアイドルさん。ご馳走さま。また会いましょう」

「待て！」

どこからか青い幕が怪人の姿を隠し、幕が上がった時には怪人の姿は消えていた。

「あれは、一体、いや、それよりも！」

未知の怪物への疑問や警戒は尽きないが、ひとまずはと奏に駆け寄る翼だつた。

あれから2年。生存者に対する偏見は無くならないが、事件そのものは人々の記憶から薄れ始めていた。

それでも、あの時のこと忘れられない者がいた。立花響。あの事件に巻き込まれた当事者だ。

彼女は今、

「立花さん！ 聞いているんですか？！」

「え？ あ、す、すいません！」

説教されていた。リディアン音楽院高等部に入学した彼女は所謂アホの子だつた。

不良行為とまではいかないものの遅刻・居眠りの常習犯。

しかし、持ち前の憎めない性格から人に愛されるタイプだつた。

彼女には特別に仲のいい小日向未来という友人がいる。響がこの学校に進学した理由には彼女の影響も大きい。

「響、ちゃんと授業は受けなきやだめよ？」

それでもう一人、目津洋^{めづよう}。見た目は中等部でもおかしくない程だが音楽の才能は特に優れている。

すでに大成しているツヴィアイウイングにも勝る才能を持つと噂される彼女は翼達と個人的な親交も持つてゐる。

彼女の特に優れた能力はその声域だ。普通、人のそれは2オクターブほど。優れた歌手でも3オクターブあたりが限界だ。

にもかかわらず、彼女の音域は6オクターブを超えるという突拍子も無い噂が立つほどだつた。

常識を超える技を持つ彼女だが、小さい頃から学者達にその秘密を知りたいとしつこく言い寄られたことがトラウマとなつてゐるらしく、身体検査の類の一切を拒否し、音楽院からも特別に免除されている程だ。

そのため目や耳は悪いらしくとも、具対的な数値は誰も知らないし、彼女の人体構造を理解しているものなどいなかつた。

放課後、二人は響の居残りに付き合つていた。

「まだ終わらないの？とつとと書いちやいなさいよ」

「まあまあ。でも響？今日はツヴァイウイングの新しいCDの発売日なんでしょ？早くしないと売れきれちゃうんじゃない？」

「あ！そだつた!! やつぱいよおー！こんな日に限つて居残りだなんて、私呪われてるかも…」

「あ、ごめんなさい。私は用事があるからもう行くわ。また明日」
チラと時計を見た洋が立ち上がる。

「うん！じゃあね！」

「また明日」

「ええ、また」

長い黒髪を波のようになびかせて洋が立ち去つていった。

「メズール…。まだかなあ？」

子供の積み木のように雑に積み上げられた机の上で脚を揺らす男。手には駄菓子のイカ串の箱を持つている。

そこへ緑の服を着た男がやつて来る。いかにもガラの悪い男といつたなりで、言葉遣いも荒い。

「ガメル」

「あ、ウヴァだ！」

「餌場が見つかった。ついて来い、少し分けてやる」

「でも、メズール待たないと…」

「そうか？ふん、残念だ。もしお前がメズールにセルメダルをプレゼントしてやればきっと大喜びするのになあ」

わざとらしい素振りだが、純粹なガメルを騙すには充分だ。

「ほんとう!？」

「ああ、本當だ」

「やつぱり、：、行く！」

抱えてイカ串の箱をかなぐり捨てる、机の城を倒壊させながら男は飛び起きた。

「何、これ、」

響がCDショッピングに向かうと、町は異様な光景に包まれていた。

人の姿はほとんど無く所々に炭が積もつていて、近くにはノイズ。そして人と虫の間の子のようなものがCDショッピングの中でツヴァイウイングの新発売CDを食べていた。

驚くべきはその店内。わずかに残った人々がその怪人にノイズから守られるようにして怯えていた。

ノイズは倒すことのできない災害。それを倒すことができるのはグリードと呼ばれる怪物だけ。グリードではないこの怪人たちもその例に漏れない。怪人達は人を殺そうと攻撃してきたノイズに対し自らの体で防ぐことしかできていない。

しかし攻撃された怪人も銀のメダルを撒き散らすばかりで、倒れる様子はない。

それでも、防衛さえできたのならノイズはいずれなくなるのだから一つの防衛手段としては無能ではない

「あ」

その光景に困惑しているのが悪かつた。響はノイズに発見されてしまう。とつさに響は走り出す。避難場所へ向けて。

それを追いかけるノイズは一人、また一人と増えていく。とにかく走つて逃げるしかない。

そんな中、響は一人の泣いている少女を見つけた。

親からはぐれてしまつたらしい。ともかくこんなところにおいていくわけには行かない。女の子を抱えてさらに逃げる。

逃げる。とにかく逃げる。

逃げた先にはまたノイズ。また逃げる。

最終的にたどり着いたのは小さなビルの屋上だつた。

ノイズはゆつくりと距離を詰めてくる。逃げ場はない。そんなとき、女の子が震えて声で尋ねる。

「私、ここで死んじゃうの？」

(?)

守る。絶対に守る。自分の命も。この子の命も！

そう思つた時、響の体に異変が起こつた。響の体は真っ黒な影に飲み込まれた。

ヤミーとノイズと戦う者

無数のノイズ。共鳴する二つの歌声。緑の稻妻。嗤う灰色の大男。街は戦場と化し、戦場は混沌と化していた。

「ハハハハハ！どうしたどうした！このままじや人間を守りきれねえぞ！」

「くつ！奏！大丈夫か!?」

「もちろん！行くよ、翼！」

「ああ！」

「どつちも頑張れ！」

少なくともこの場においてグリードとシンフォギア装者が取るべき最も効率的な行動は一致していた。

互いに協力しノイズを殲滅すること。それは人を守りたいシンフォギア装者、宿主に死なれては困るグリードの両方に都合がいい。

しかしそうする事は許されなかつた。グリードはいたずらにシンフォギアを攻撃し、シンフォギアもまた正体不明の怪物に対する攻撃をやめない。

ノイズ、グリードとヤミー、シンフォギア。三つの陣営がそれぞれに争っていた。こ

の三竦みは度々発生する。

優勢なのはいつだつてグリード。翼たちが相手にするには完全体のウヴァは強大すぎた。ノイズの殲滅をしていなければ、純粹に翼たちを狙つていれば命はないだろう。

(せめてもの救いはある灰色に戦う意志がないらしいということか、ヽ！)

ガメルはただ見ている。蟻が死んだ蝶の花びらを見る子供のように、小動物同士の小競り合いを眺める巨象のように。

あの灰色とこの緑はグリード。明らかに他の奴らと比べて格が違う。それは翼たちにも理解できる。他の奴らなら苦戦は強いられるが倒せない相手ではない。しかしあの二人だけは絶対に敵わない。

(それでも、見過ごすわけには、ヽ！)

その時、新たな歌声が響いてきた。

「なんだつて!?・・・翼！」

「ああ！」

二人は駆け出した。通信機から聞こえてきた声のためだ。

その内容は新たなシンフォギアの出現。それだけでも充分に異常事態。しかし問題はそれだけでは無かつた。

出現したギアの反応はギャングニールという聖遺物のものだつた。

ギャングニール。それは奏の持つギアだ。

なぜそんな物があるのか。

二人はすぐさまその反応があつた場所に駆けつける。

この場のノイズは怪物たちに任せればいい。怪物たちはノイズを優先するはずだ。
理由はわからないが怪物達は人間を守らなければいけないらしい。

「おい！どこへ行く！」

「あ！にげるくな！」

構わない。一直線に走り抜けろ。

（新たなギャングニール、なんとしてもその正体を突き止める！）

走り去る二人の戦士。ウヴァは激昂する。まだ戦いの最中だ。

足りない。闘い足りない。もつと闘え。

そんな気持ちが沸き起こる。どうせ満たされることなど無いというのに。

「オレと戦エエエエッツ！」

ウヴァアの頭の角から稻妻が放たれ、ノイズを周囲のアスファルトごと吹き飛ばす。しかし戦士は既に去っていた。

「チツ！」

ウヴァアは追跡を諦め、セルメダルの回収に向かうため振り返る。
そこには、ガメルの腕があつた。

「何ツ！」

完全体のウヴァアといえどこの距離でガメルの一撃を食らつては大きなダメージとなる。

ガメルの大砲が放たれた直後、メダルが飛び散った。

大量の銀色のメダル。それはそれは大量でとてもウヴァアの体内に収まるようには見えない。ミルク缶いっぱいに詰めれば何杯分になることか。

そして、数枚の緑色のメダル。

「ガメルツ、！お前！……メズール、か、！」

「ふふ、大正解」

ガメルの巨体の後ろからメズールの姿が現れ、飛び散ったコアメダルをキャッチする。

「いい子よ。ガメル」

「うん！」

「さて、そろそろあつちに行かないといけないわね。またね、ウヴァ」

「響!？」

「洋！なんでこんなところに？」

「なんでつて。こっちの台詞よ」

響が謎の組織に連れられてきてみれば、ツヴァイワイングの二人だけでなく学友がいた。

充分に驚くべきことだ。それは洋にとつても同じことで、思わず声を出してしまつた。

「私、なんかこう、バツ！シユババツ！みたいな感じでよく分かんないことになっちゃつて」

「もしかしてシンフォギアのこと？あれ、言っちゃいけないんだつたかしら」

しきじつた。と言うように手で口を抑える洋。そんな様子を見て奏が歩いてきた。

「いいっていいって。一般人なら駄目だけど、その子にはもう説明するしかないでしょ」

「あ、奏さん」

「よつ！」

明朗快活。その一言に尽きるスーパーアイドル、天羽奏がそこにはいた。

「知ってるだろうけど紹介するわ。天羽奏さん。ツヴァイウイングの片翼であり、ギャングニールのシンフォギアを纏つて戦うの」

その言葉に響が反応する。

「ギャングニール？」

「そう、響と同じギアなの」

ギアと言われてもすぐに理解できるはずはないが、なんとなく異常事態であることだけは多少頭の足りない響にも察せられた。

「原因はまだわかつてない。多分2年前の事故じやないかと思うんだけど」

ノイズの猛攻に碎かれたギャングニールの欠片が響の胸に刺さったのを奏はその目で確認している。

「それで、洋はなん？」

「知りたい？ふふ、実はね、」

笑みを浮かべてこれから正体を得意げに明かそうというとき、一人の男に阻まれ移動を促される。

「はいはい、奏さん、洋さん、それからあなたも。先に移動しましょう」

「ど、言うわけよ」

新たなシンフォギア装者を歓迎するパーティーの中、特異災害対策機動部二課とシンフォギアに関する説明を受けた響に多少不満げになつた洋が自らの立場を教える。

それは、ツヴァイウイニングのカウンセラー兼特機部^{とつきぶつ}二の外部協力者というもの。主に銀のメダルに関する情報を取り扱っているらしい。

「洋くんは我々にとつて非常に重要な役割を担つている」

筋肉ムキムキマツチヨマンの赤シャツ男が言う。この男はこの二課の司令官であり翼の叔父である風鳴弦十郎だ。

「あ、弦十郎さん。これ」

「これは？」

「前に話したでしよう？ コアメダルよ」

「コアメダルだとオ!?」

洋の話ではグリードをグリードたらしめる聖遺物に似て非なるもの。 2つのメダル。 その特に強大な力を持つメダル。

「一体これをどうやつて!?」

「例の協力者がくれたの」

グリードの様子は何らかの干渉によつてカメラで確認できない。 グリードに何があつたかを知る術を持っているのは洋だけだ。

そして洋は更に外部に協力者を持つている。

メダルの力で戦う銀の戦士。 あくまで洋の仲間であり二課の人間ではないため二課からの接触は出来ないが、 それでも大きな利益をもたらしている。

「これはウヴァのコアメダル。 これがここにある限り奴は完全体になれないわ。 これまでウヴァは完全体故にあれだけの力を発揮していたの。 もちろんまだセルメダルが大量にある内は厳しい戦いになるでしようけれど、 それさえ何とかなればウヴァを打倒できる」

「よ、 洋、 、 ？」

急に事務的な会話を繰り広げる洋に困惑する響。

「あら、ごめんなさい。今は響が仲間になつたことを祝わないとね」
「うん！」

「クソツ！クソツ！まさかアイツがいるとは！奪われたコアメダルは全部で六枚…。
セルメダルだけでは足りん！」

殆どのコアメダルを奪われたウヴァアは何とか廃マンションに逃げ込む。

「アイツらからメダルを奪い返すには、、カザリは駄目だ。信用ならない上にこの国
にいない。アンクも使えん！下手をすると俺がやられる。ガラは小物だ。使い物には
ならん。残るアイツは、、」

ニヤリと笑うウヴァア。たつた一人、あの男なら。最強のグリードであるアイツなら：

！

宣言と秘密と鉢合わせ

響がシンフォギアを纏つた日から数日。ある噂が事実であると証明されてしまった。

グリードは人を襲う

表立つて人を襲うことは無かつたグリードはこれまで疑惑は持たれても、それが本当だと思っている人間は少なかつた。

ウヴァアというこれまで唯一名の割れていたグリードが人を助けている光景が何度も目撃されているし、その写真も取られている。

ウヴァアは人々にノイズに対抗できるヒーローとして扱われていた。

しかし、あるグリードが人を襲う姿がカメラに納められてしまつた。結果として一気にグリードに対する不安が沸き起つた。

そのグリードの名はガラ。爬虫類のコアメダルを持つグリード。これを受けてそれまで姿を隠していたグリードも何らかの動きを見せるようになる。

メズールもその一人だつた。

(まずいわ。ウヴァアさえなんとかすればヘマをするような奴はいないと思つたけど、まさかガラまでいたなんて、)

「どうかした？洋」

「え？ああ、なんでもないわ。そういうえば響はどこかしら」「響？響なら用事があるつて

「また？」

「うん、響つたら最近忙しそう」

そこへ仲のいい女生徒たちがやつてくる。

「未来 洋、何してんの？」

「響が心配だなって」

「そうですね、グリードのこともありますし」

この辺りはグリードがよく現れるらしい。その事も心配を加速させる。

「アニメじゃないんだから。そんな簡単にグリードに遭うことなんてないでしょ」

「ふふ、だといいわね」

実際にはグリードはすぐ近くにいる。この場でそのことを知っているのは洋だけだ。

「洋ちゃん。ちよつといいか？」

話しかけてきたのは口ひげを生やした三十ほどの男。

リディアン音楽院の用務員を務め、嫌気のない性格で軽く音楽院の愛され者となつて
いる。

「あ、用務員さん。ここにちは」

「おう、ここにちは。ちよつと洋ちゃん借りていつていいかな?」

男は笑顔で挨拶を返すと洋を指差す。

「うえつ!?用務員さんつてもしかして、、口リコン?」

「はは。アニメじやないんだから、そんなわけ無いだろ」

「それ私の!?」

「…ちよつと待ちなさい。今、私を口リ呼ばわりしたの?」

「いや、、それは、;」

洋がジリジリと女生徒に近づいていく。その指はとても人間と思えない程ウネウネと動いていた。

「い、いや、いやああつつ!!」

・・・・・

「こんなものかしら」

洋を口リ扱いした女生徒は体をビクビクと痙攣させて白目を向く。

「いや、、洋の必殺こちよこちよの威力は相変わらずね」

「それじやあ、私はこれで」

「うん!またね!」

「それで、一体なんの用？バスの坊や」
男、伊達明は答える。

「実はな、あのノイズっていう化物、操ってる奴がいるみたいだ」
「へえ？」

それは洋にとつても興味深い話だ。

これがこの男を使う理由。この男はこの手の話を仕入れることが出来る。この男であれば、相応の報酬を用意すれば従順に命令を聞く。他のグリードでは決定的に性格が破綻しているため、こういった使い方をするにはこの男がいい。

「その操っている奴というのは？」

「それが知りたければ、：」

伊達は口には出さないがその分要求を身振りで表現する。

「また？もうだいぶ撒いたと思うけど？」

「まだまだ。必要な人は地球上のどこにでもいるからな」

「ある意味、貴方も貪欲ね。分かったわ。それで？」

「ああ、犯人だな。まだ姿を見ただけだがお前らの言うシンフォギアを使っていた」「なんですって!?」

「ちょっと接触してみた時、歌を歌っていたから間違いないと思うぜ。つー訳で水撒き、よろしく！」

数日が経つてのこととなる。

「ガラ討伐、だと？」

モニターに表示されたグリード達の声明に弦十郎を始めとした人々が驚愕する。

別段どうということもない街中にグリードが集まり、その様子を各局がLIVEの文字付きで放映していた。

画面には五人のグリードが並ぶ。

前よりも頼り無い姿のウヴァ。

グリードの中でも目立つ体躯であり、装者の前に現れたこともある灰色のグリード。2年前、ライブ会場に現れた女のような身体付きの青いグリード。

見たことの無い鳥と人の混ざったような赤いグリード。

そして、紫のエスニックの服装に身を包む青年。

『皆さん、俺たちはグリード、人ならざる怪物です』

『だが、俺達は人を襲わないという誓いを俺たちの間で結んでいる』

『ガラは、黄色いあのグリードはその約束を破つた。人類に仇をなした』

『よつて私達はガラ討伐を決定しました。近日中にガラを討伐した報告ができるでしょう』

『ガラ、たーおーすー』

『それでもう一つ。大切なお知らせがあります』

『ノイズについてだ。通り魔に合う確率とそう変わらないはずのノイズがここしばらく頻繁に出現している』

『それは何故か。その答えが、ノイズを出現させる存在が確認されました』

『ノイズからの避難中に歌を聞いたことのある者がいるだろう。その歌を歌つている者こそノイズを出現させ操つている犯人だ』

そう言い残してグリードは5色の幕の中に姿を消した。

「弦十郎さん！ 一体これはどういうこと!?」

途端に司令室に洋が怒鳴りこむ。

「わ、わからん！ 何がなんだか、？」

「風鳴司令！」

「なんだ！」

「ノイズです！」

「なにいつ!?」

急いで翼、奏、響が駆けつける。

「行きます！」

響が立候補した。当然三人での出撃になるだろう。

しかし、翼が制する。

「待て、立花はここに居ろ」

「え？」

「翼、もう響も充分に立派な戦士だと思うよ？」

真つ先に意図を汲み取った奏が反論する。翼は響が戦うことによく思っていない節がある。

今回もきつとその事だろう。

「駄目だ！この戦い、嫌な予感がする。立花はまだ半人前だ、ここに居ろ」

「そんな、」

「そこへ、もう一人。

「そうねえ。確かに響ちゃんは今回は待機のほうがいいかもしないわね」

「了子くん。今までどこに？」

「ちよつと気になることがあつてね。それより、このタイミングでのノイズの出現は妙よ。それにグリードとの遭遇に気をつけなければならないわ」

「なら尚更響くんもいたほうがいいのでは？」

「いや」

口を挟むのは翼。

「グリードが複数であれば我々が劣勢になる可能性が高い。そうなれば立花を連れているのは重荷になつてしまふ」

「翼！そんな言い方をしなくたつて」

「聞いて奏。これは立花のためでもあるの！」

「でも！」

互いに熱くなるツヴァイウイング。互いを理解しているからこそ互いの考えも分か る。それでも根本的な部分の相違から二人は衝突する。

「とにかく！響は連れて『いいんです！』

「え？」

「私が足手まといなのは分かつてますから。それより、早くしないと被害者が増えす。

「私が足手まといなのは分かつてますから。それより、早くしないと被害者が増えちゃいます！」

「もう、分かつた。響くんは待機。二人とも、行つてくれ！」

「ふん、こんなもんか。オイ映司！帰るぞ！今日の分のアイスがまだだ！」

鳥のグリード、アンクは怒鳴る。ノイズ相手では心が満たされる気配すらない。

「待てよアンク。持つてんだろ？俺のメダルを！」

ウヴァがアンクの肩を掴む。

「あ？」

「随分と上手に隠していたみたいだが、アイツがこの世界に来ているのならお前の仲間に違いない。とつとと返せ！」

「何言つてんだ？おい、行くぞ映司」

アンクが呼びかけた先には化石のようないい頭を持つグリード、火野映司がいる。

「ふん。まあいい。それよりもお前に話がある」

ウヴァは映司を指差す。

「俺？」

「ああ、この際お前らの持つ俺のメダルのことはいい。それよりもメズールが問題だ」
その言葉を聞いたメズールが首を傾げながらウヴァ達の方へ顔を向ける。

「アイツは俺のメダルを奪った。ガメルのメダルも実質手にしているようなもんだ。
このままだとメズールはきっとコアメダルをいくつも取り込みそのうちお前達でも手
がつけられなくなる。いいのか？」

ウヴァは自分のメダルを取り返すように映司に頼み込む。だが、

「残念だったな。そいつはこの場にお前のメダルを持ってきていいない」

「なにっ!?」

アンクが口を挟んだ。アンクの眼はグリードの中にあるコアメダルの正確な位置を
知ることができる。

「う。そのアンクがないと言っているのだから、アンクが嘘をついてない限りは確かだろ
う。」

「そ、それならガメルが！」

「バカか！持つてりや先に言つてる！」

「ぐつ、！だが俺のメダルは確かに……！」

その様子を見て映司が言う。

「それは後、今はガラを探さないと」

「動くな！」

「全員、大人しくしてもらうよ」

そこへ翼と奏、そしてもう一つの影が現れる。

「後者は捕つかれなか
儀様はここにいる方で」

「ジ」、「ジ」、「ジ」、「ジ」

二月の雪の音が聞こえぬ。同朋の語る

ガラだつた

ガラとバースと合わせ技

「ガラガラガラガラガラ!! 久し振りだな!」

蛇のような頭、亀のような甲羅、鰐の顎のような足、身体を覆う黄色い鱗。ガラがグリード達に声をかける。

「ハン、見たくもない顔だがな」

「ガラ、久し振り」

計6体のグリード。洋の情報ではウヴァ以外の全てが完全体。その上、グリード達がいる場所は何らかの妨害があるのか二課のカメラに映らない。はつきり言つて勝利は絶望的だ。

希望があるとすれば、5体のグリードが目標はガラだと言つてること。

もし事実であれば、この場を逃れることはできるかも知れない。

「翼、無理だ。逃げよう」

「ああ。ノイズが居ないのであれば私達の戦場はここにはない」

その場を離脱するためなるべく音を立てないように走り出す二人。しかし、そうは問屋が下ろさなかつた。

「どこへ行くつもり？ 可愛いアイドルさん」

「!?」

2年前のあのグリード。かつて奏たちを助けたグリードが行く手を阻む。「オ」ズ、向かってくる人間なら戦つても問題ないよな？」

「ちょっと待って！ 今はガラを」

「勝手にやつてろ！」

構わず走り出すウヴァ。もちろんその標的はシンフォギア装者だ。

「くつ、くつ！」

「翼！」

ウヴァの拳と翼の剣がぶつかる。

「ガラガラガラ！ 俺様もちようど暴れたかったところだ！」

「そうか。なら、俺が相手してやる！」

ガラとアンクがこれまた自分勝手に戦いを始める。

「オレも混ざるく！」 「私も。少しは楽しめそうね」

ついにはガメルとメズールが乱入し、戦場をかき乱す。

「皆落ち着いて！」

映司が止めようとするも誰一人として聞く耳を持たない。

「映司！稼ぎどきだ！お前もやれ！」

「今はオーナーには成れないけど、やるしかないか!?」

一度闘つてしまえばグリードとしての欲望を抑えきる自信はない。今はかつて暴走したときのように自分を止めてくれる存在もないのだから。

映司は悩む。悩みに悩み、闘うことを決めようとした時。

「お、やつてるねえ」

伊達明は現れた。

「な!?用務員の、！」

「そこは危ない！早く逃げろ！」

翼達は戦う力の無い用務員がノコノコとやつて来た事に驚き、逃げるよう促す。

「伊達さん!?伊達さんもこっちに!?」

恐竜のグリード、映司も驚く。

「貴様、メダルを返せ！」

ウヴァアは激昂する。ガメルに不意打ちを喰らわされた後にふらりと現れ、ウヴァアのメダルの大半を持っていったのはこの男だ。

「おう火野、久し振りだな。こつちでよろしくやつてるよ。なぜかは知らないが、おまけも有るしな」

「あつ、それ！」

伊達が取り出したのは一見すると何に使うのかすら分からぬ機械らしきもの。しかしそれが何かはこの場では殆どが知つていた。

「お嬢さん方、人気があるのは結構だけど、戦えるのが自分だけとは思い上がらないこと。そのうち足元掬われるぞ？」

「何？」

伊達はベルトを巻き付け機械はバツクルとなる。

「用務員さん！あんた一体、：」

「さて、稼ぎますか！」

伊達の手にはどこから取り出したのかセルメダルが握られている。

そのセルメダルをコイントスをするように指で弾き、逆の手でそれをキャッチする。「変身！」

左手に持つセルメダルをベースドライバーに差し込み、ドライバーの右手側に取り付けられたレバーを回す。

カプセルトイのカプセルが開くような音がなり、伊達の体を銀の鎧が包み込んだ。

「さ、おいで。貧相なクワガタちゃん」

「あの野郎、！」

バースに煽られたウヴァが走り出す。しかしウヴァがバースのもとまでたどり着くことはなかつた。

「なつ！」

「隙有り！」

ウヴァの体をギャングニールが穿いた。セルメダルが大量に飛び散り、グリード達が皆等しく注意を向ける。

「翼！」

「ああ！」

グリードはセルメダルを求める。その習性上どこかにセルメダルが溢れていればそちらへと誘導できる。

その機をつけば脱出が可能かもしけない。

「行こ、うつ！」

「奏!?

ギャングニールを引き抜こうとするも、ウヴァの腕がガツチリと掴み引き抜けない。

「クソッ、：、放せつ！」

「奏、危ない！」

「えつ？」

いつの間にか現れた白ヤミーに似た、それでいて何処か不完全さを感じさせるヤミーが奏にまとわりつく。

意外な力強さ、そしてその数に奏は動きを封じられる。

「奏！」

「翼！逃げるんだ！」

「お前だけでもおおつ!!!」

「往生際悪いぞ」

複数のエネルギー弾が肩ヤミーを一掃する。

それはバースの持つバースバスターから放たれた。

「全く、俺の見せ場奪つてくれちゃつて。高く付くぞ？これ以上やられちゃ上がったりだ」

ウヴァを撃ち抜きギャングニールを掴む手を放させたバースが続ける。

「早くどつか行つてくれ」

「!!」

言葉だけ見ればそれはいい意味ではない。

しかしこの状況にあつては意味が変わつてくる。

「とりあえずは感謝する！奏！」

「ああ！いこう！」

二人は戦場を離脱する。

残るはグリード達。

「おーい、伊達さん！」

「火野、お前も元気そうだな。敵はそいつか？」

アンクと交戦するガラの方を見るバース。

映司が頷く。

「やれるか？」

「はい！」

できるだけ暴走はしないように。大丈夫。それにいざとなれば伊達さんが止めてくれる。

「映司！手伝え！」

「ああ、もちろん！一気に決めるよ！」

「私も手助けしてあげるわ。その代わり、ウヴァアのメダルのことはチャラね」

「メズール！」

ウヴァアがシンフォギアを追つたかはたまた単に撤退したか、どこかへいなくなつたのを見届けたメズールが歩いてくる。

そしてガメルも。

「ガラの力は概ね理解しているわね？強くはないけれど、あの回復力と防御力は厄介だわ」

完全体のガラの回復力は凄まじい。そのため回復する暇もなく倒す事が望ましいが、そのためには防御力が邪魔になる。

「ガラガラガラ！俺様を倒すだと？馬鹿め。生き延びることに関してはグリードで最も優れた俺様は決して倒せんガラ！」

「実際、厄介なやつだな、火野、どうする？」

「俺に作戦があります」

「それが作戦？」

映司の言う作戦を聞いたメズールは呆れ果てた声を出す。

「前言撤回するわ。ねえガラ？やつぱり私達、そつちへ付くわ」

「なんだと!? メズール、お前！」

「だつて、そのほうがよっぽど堅実なんですもの」

囁み付くアンクを気に求めずにメズールは歩き出す。

「ガラガラガラ！いいだろう。来い、メズール、ガメル！」

メズールとガメルはガラの横に並び立つ。

「じゃあ、ガラ。友情の握手」

メズールが手を差し出す。その手をガラは喜んで握る。

その瞬間に、ガラの身体は感電した。

「！」

そして体の自由が聞かなくなつたところでメズールが組み付き体中の吸盤で拘束す

る。

電撃による麻痺。加えて余計な部分の無い筋肉と吸盤のみで構成されたメズールの足に抑えられれば抵抗の余地などない。

「はい、ガメル」

「まーかーせーろー!!」

鈍重なガメル。グリード随一のパワーを誇るガメル。

ガメルの本気の一発は動く対象にはろくに当たられたものでは無い。しかし、メズールによつて拘束され身動きの取れない相手であればその限りではない。

ガメルの体内に蓄えられた大量のセルメダルがエネルギーとなつて両腕、そして頭に集中する。

膨大なエネルギーを溜め込んだ爆弾とかしたガメルの腕と頭がガラの身体を打つ。

ガメルの渾身の一撃はどんなグリードであつても満身創痍に追いやりのほどの威力を持つだろう。一撃の重さにおいてガメル右に出るものは存在しない。

たちまちガラの身体を覆つていた鱗や甲羅は粉碎され、セルメダルとなつて弾き飛ぶ。

「ガラ、！早く回復を、！！」

ガメルの攻撃の余波を避けるため既にメズールは離れている。

なんとか守りきつたコアメダルさえあれば回復などすぐに出来る。はずだつた。

「俺の番か」

「何!?」

頭上からの声。そこにはアンクの姿があつた。

「ヘビにカメにワニか。ハン、どれも焼けば食いもんぐらいにはなるな」

突如ガラを中心に竜巻が起ころ。炎を伴つたその竜巻は回復しようとするガラの体を焼き、裂いた。その継続したダメージはガラの回復と拮抗し、阻害する。

炎と風の合わせ技による継続的な破壊はアンクの専売特許だ。こんな芸当をやつてのけることが可能なのはグリードでもアンク以外にない。

「伊達さん、今！」

「おう！」

「!？」

気がつけば目の前にはゴテゴテに武装したバース。それこそシリエットだけならガメルとそうは変わらない。

その武装の中央に設置されたキヤノン砲にはセルメダルのエネルギーが充填されていく様子が見て取れる。

[CELL] BURST]

ブレストキヤノンから放たれた一筋の光がガラを飲み込む。

グリードでさえ危険に晒す一撃。自慢の回復能力、防御力を封じられたガラがくらえ

ば結果は一つ。

メダルが飛び散る。セルメダルだけでは無い。ガラの持つコアメダル、その全てが宙を舞う。

「映司！あのメダルだ！」

「火野！」

アンクが一枚のメダルを指差す。それはガラの意思が宿るメダル。

「はい！」

火野映司。仮面ライダーオーズとして世界を救つた男。そして今は、紫のメダルをコアとするグリード。

紫のメダルの力は無。

欲望の中でも異例の欲望。そしてその力はこの世界で唯一、コアメダルを破壊出来る。

映司のトリケラトプスのように力強い腕がガラの意思を持つメダルへと届き、握りつぶした。

「ふー。儲け儲け。トカゲちゃん、相当溜め込んでたな」

「ええ、全く、よく気づかれずにここまでやつたものね」

「メズール、メダルどーぞ」

伊達とメズール、そしてガメルの三体のグリードが廃墟の中にいた。

「ふふ、ありがと。でもそれはガメルが使いなさい。それから、これも」

メズールは二枚のオレンジ色のメダルをガメルに投げ込む。それは、ガラの持つていたカメメダル。

メダルはガメルの身体の中へ沈むようにして入り込んだ。

「じゃ、こつちの報酬を頼む。どうせあのトカゲグリードよりも溜め込んでるんだろ？」

「ええ、まあね。それじやあガメル、私は少し出かけるから、良い子にしてるのよ?」
「うん！」

返事を聞いたメズールの体が一度メダルに包まれ、次に見えたときにはその体は目津洋のものへと変わっていた。

流れ星とネフシュタンと新ヤミー

「洋、明日帰つてくるんだつけ」

洋が短期の留学に向かつて数日。響と未来は休み時間に二人で話していた。

「…」

「響？」

「へ？ああ！えつと、：なんだつけ？」

未来は呆れたように溜息をつく。

「響、最近変だよ？最近どこかに行っちゃうことも多いし」

実際、シンフォギア装者としてノイズと戦うようになつてから未来といふ時間は目に見えて減つている。

約束を反故にしたことさえあるほどだ。

「あはは、ごめんごめん。でも、今日の流れ星は一緒に見ようね！」

「もー、約束だよ？」

「うん！約束！」

そんな会話が繰り広げられるのと同じ時間帯、リディアン音楽院の地下に位置する二課の本部では弦十郎と伊達が話をしていた。

「驚いた。まさか洋くんの協力者がこんな近くにいたとは」

弦十郎は言う。リディアン音楽院には政府との関わりが少なからず存在する。そんな施設に用務員として籍を置きながらこれまで息を潜めていたのは弦十郎にとつても驚くべきことだった。

「いやいや、こちらこそ。うちのパトロンがいつもお世話になつてます」

「パトロン?」

「そそ。戦力やら情報やらの手伝いをしてやる代わりに、あつちは俺の欲望を叶える。そういう約束だ」

ヒノエイジという名のグリードとも関わりのあるらしいこの男が何者であるかとう疑問は残るが、洋の知識の出どころは判明した。そしてこの男にはヤミーと戦う力がある。

であれば、

「頼みがある。我々と一緒に戦つてはくれないか」

「断る」

人類を護る戦い。その誘いを伊達はすぐなく断つた。

「俺、そういうの向かないんだわ。俺の後輩なら大好きそうなんだけど、ごめんね？」

「そうか、残念だ」

「あ！ そうそう、これ。俺からのバースデープレゼントね」

伊達の手には白い小さな箱が握られていた。まるで結婚指輪を贈るかのようだ。

しかし伊達が開けたその中にはオレンジ色のメダル。よく見るとコブラのような意匠が施されている。

「これは、、！」

心当たりは一つある。むしろその一つ以外にはない。

「ガラか！」

「残りのはグリードが仲良く持つていったからやれねえんだ。悪いね。つーことで、

じや

「待つてくれ！」

ミルク缶を担ぎ、立ち去ろうとする伊達に弦十郎は尋ねる。

「誰の、誕生日なんだ？」

「さあ？ じやあ、俺たちの友情の誕生日つて事で！」

「行つてしまつた、」

「行つちやつたわねえ」

「居たのか、了子くん」

弦十郎の持つていたコアメダルをヒヨイと取り上げ、了子は更にポケットから緑色のコアメダルを取り出す。

「コアメダル。年季は浅いけど聖遺物と同等の異端技術。シンフォギアとしての利用も可能ではないか」

「ああ」

「の、筈がどうしてもうまく行かない。他の聖遺物とは何かが違う。困つたものね」
エネルギーはコアメダル一枚からでも充分なほどに検知できる。

しかし、何をやつてもうんともすんとも。完全聖遺物さえ起動できるようなほどフォニックゲインを高めてもなんの反応もない。

そこではない何かが足りていない。

結果、現時点でのコアメダルの活用は不可能とされている。

「メダル、そしてヤミーにグリード。どうしたものかしらね」

「ああ、そうだな、：」

「また、大事な用なの？」

夕暮れ。悲しみのこもつた声。一体何度目か。
響が最近何をやっているのかは分からぬ。響は嘘をつくような人間ではない。
それに、人を悲しませようとする人間でもない。

きっと本当にどうしても欠かす事のできない何かがあるのだろう。

それでも、悲しい。寂しい。そう思つてしまふ。

そして願う。響と共にいたい。流れ星を見たい。

そんな願いに、欲望に。

ソレはつけ込んでくる。

「その欲望、解放しろ」

「え」

投げ込まれた1枚のメダル。抵抗することなくメダルを飲み込んだ未来の中からミ
イラのように包帯巻きの怪物が現れる。

怪物はすぐさま包帯の姿から人型のトンボの様な姿に変わる。

「キヤアアアアアア!!!」

未来は腰を抜かす。

「喚くな」

未来のすぐ側まで歩いてきたウヴァアが未来の喉元に右手の鉤爪を突きつける。
「大人しく、出来るな?」

「んふふー。うまいうまい」

人間の姿になり箱で買った大量の駄菓子を公園で貪るガメル。

流れ星を見られると耳にしたためずつと待っている。

しばらく待っていると流れ星が見られるよりも先に地面から爆発音が聞こえ、ノイズ
が一体現れた。

ノイズとガメルは互いに互いを無視し、それぞれの目的に夢中だ。

「あ!」

夜空を二筋の光が駆ける。

「流れ星！」

そうガメルは思った。

しかし、実際には翼と奏が跳躍しながら近づく様子であり、流れ星では無い。その証拠に光の片方から放たれた斬撃がノイズを両断した。

「アンタ！何やつてんだ！早く逃げろ！」

夜空を見上げる男に奏が叫ぶ。

おそらくこれで最後のはずだが念の為避難をしたほうがいい。だが、

「ながれぼしじや、無かつた、、」

落ち込むばかりで避難をしようとはしない男。

「翼、ちよつとあの人のこと見てくるから、こつちは宜しく」「・・・ああ」

翼はまだ認められない。響が戦うことを。

自分と、そして奏がいるのだ。わざわざ響を動員することもないだろう。

響だつてノイズと戦うことができるることは確かだ。

しかしそれは奏や自分とは違う戦えるというだけのものだ。とてもではないが戦力として数えるべきものではない。

特殊なノイズやヤミーに出会つたときには的確な対処を行える保証はない。

「何をしている？ノイズが居なくなりや戦いは終わりだつてか？」

「？」

突然かけられた声に翼が振り向くと、そこには白い鎧をまとつた少女がいた。翼が驚いたのは鎧の方。あのライブの日、奪われたネフシュタン。

間違いない。ネフシュタンだ。

何故こんな所に、！

「翼さん！ 危ない！」

「？」

後方からの強襲。背後からの声が無ければ危なかつたかもしれない。

攻撃を行つた張本人の姿はまるで人とは思えなかつた。

「ヤミー、：、！」

透けた薄い羽。複数の小さな腕。複眼。鎧のような外骨格。

これまでの報告例と合わせて考えればひと目でヤミーとわかる。

他に魚のようなヤミーが確認されたこともあるが、どちらも人に対し直接的な危害を加えることはなかつたはずだ。物を食べたり壊したりということはあつたが。

しかしシンフォギアに対してはその原則を外れるようで、今までに何度も交戦してい

る。

その力はよほど奇妙な力を持つていらない限りはシンフォギアよりも弱い。

そんなものが単体でやつて来るものだろうか。普段はウヴァアがついているが、今もどこかに？

「ウヴァアは居ない。そして俺の目的もお前ではない」

「!?

心を読むが如く翼の疑問に対し勝手に語り始めたトンボヤミー。その顔は翼からゆつくりと逸られ、響の方を向いた。

「私!?

驚いた響がたじろぐ。途端にトンボヤミーは響めがけて飛びかかる。

「無視してんじゃねえ!!

「なつ!?

トンボヤミーの行く手を阻んだのは意外にもネフシュタンの鎧を纏う少女。手にした鞭から放たれたエネルギー弾がトンボヤミーの眼前で炸裂した。

「誰だお前は!?

「さあな!」

ネフシュタンの少女とトンボヤミーが向かい合う。そこへ青い斬撃が放たれる。

「私も忘れないでもらおうか！」

ヤミーと少女はそれぞれに斬撃を回避し、三者は睨み合う。

「立花！ 一步も、いや、一拳手一投足たりとも動くな！」

「ほう、？」

翼の指示通りに響が身体を動かさないようにと動きをピタリと止めると、トンボヤミーは響に飛びかかるうとしていた羽の動きを納める。

「まさかそこまで素直だとはな。おかげでやり易くなつた！」

翼が剣を振りかざしネフシュタンの少女に斬りかかる。

「残念だが、アタシも目当てはお前じゃないんだな、これが」

ネフシュタンの少女は鞭で翼のアメノハバキリを弾くと一直線に響へ向かう。
しかし、それを制止したのはトンボヤミーだった。

「それは俺の獲物だ！」

スピードでは少女をトンボヤミーが上回る。響を狙い二人が互いの動きを牽制し合

う。

「どちらにも取らせないとも！」

巨大化した翼の剣がネフシュタンの少女を押しつぶさんと落下する。

「ちょせえ！」

後方へ跳び退いたネフシユタンの少女がエネルギー弾を放つ。エネルギー弾は翼の剣を碎く。

砕かれた剣の向こう側から普段の大きさを持つた剣を構えた翼が突進する。

「もらつた！」

「そうかな？」

「!?」

視界の外から猛スピードで行われたトンボヤミーによる突進をもろに受ける翼。その衝撃は大きく、激突した地面をえぐりとる。

「どうやら、もらつたのはアタシの方だな！」

二人の組み合う場所をめがけてエネルギー弾を投げ込むネフシユタンの少女。しあなたは着弾前にトンボヤミーが高く舞い上がり回避しその後翼の蒼ノ一閃によつてかき消された。

「お前も邪魔だ！」

高位置にいるトンボヤミーがネフシユタンの少女に向かい急降下。ただでさえ尋常でない飛行速度に落下速度を加えた体当たりは大きなエネルギーを生む。躰しきれずにネフシユタンの少女はその攻撃に掠る。それだけでも相当な威力になるが、その傷はみるみるうちに塞がつっていく。

「グッ、！」

傷の回復ではあるのだろうが、体を侵食するようにして行われるそれに少女は顔をしかめる。

そして反撃のために体制を立て直そうとしたところ、トンボヤミーの第二撃が迫る。しかし、トンボヤミーは突然顔を上に向ける。ほとんど全ての方向を見渡せるトンボヤミーの複眼であれば顔を向ける必要はないが、それはそれとして驚異と思われるものの方向を気にせずにはいられなかつた。

ネフシュタンの少女がつられてそちらを向くと空に無数の剣が浮かんでいた。

「もう遅い！ 脱出不可能だ！」

それらは二人をめがけ降り注ぐ。

だが、その剣は地面へ落下することは無かつた。むしろその逆。空へと飛び去り幾筋もの光となつて飛び去つた。

そしてゆっくりと歩きながら戦場へと現れた新たな怪物。それは頻繁に確認される虫型や魚型ではなく、カバのようだつた。

裏切りと奏と一枚のメダル

「あれは一体、」

目の前で起こつた現象と新たな怪物。関係がないはずなどなく、即座に敵の増援に思
い至る。

事実、トンボヤミーはすぐさまカバの怪物へと近寄った。

「ガメルのヤミーだな。丁度いい、俺を手伝え。後でたんまりとセルメダルを分けて
やる」

勝ちを確信し嗤うトンボヤミー。その隣では無言でカバヤミーが間抜けのように口
をぽかんと開いていた。

「おい、聞いてるのか!?」

トンボヤミーはカバヤミーを指でつつくが、やはり反応がない。

そうした光景を見ているネフシュタンの少女はこれを好機と捉える。

不意をつけば響を回収して帰ることも可能だろう。視線をカバヤミーから身体を動
かすまいとしている立花響へと移す。

あと少しあとほんの少しでもトンボヤミーに隙が生まれたなら即座に走り出す準備

をする。

また、一方で翼は一つの懸念を頭に抱いていた。

すなわち、奏の安否だ。このカバヤミーが現れたのは奏がいた方向のはずだ。ふと嫌な想像をしてしまう。

もしそうだつたなら。そう思うと無意識にアメノハバキリを握る手に力が籠まる。

ほんの数瞬の内に何かが起ころる。誰かが動く。

その状況で一番に動いたのはカバヤミーだった。カバヤミーの開けた口が閉じられた。

トンボヤミーの頭を砕きながら。

なんの前触れもなく、一直線にトンボヤミーをめがけて放たれたカバヤミーの噛みつきにいくら素早いトンボヤミーも反応しきれずに爆散する。

いくらかのセルメダルが飛び散り、先程翼の放つた千ノ落涙のように空へと飛んでいく。

まるで流星群のように光の筋を描いて。

「なっ、！」

翼とネフシュタンの少女は目を見開く。

「お前！何やつてんだよ！仲間だろ？！」

少女の問いかけにもカバヤミーはまるで反応を示さない。ただ閉じられた口をゆつくりと開くだけだった。

「ちいっ！」

態度が気に食わなかつたか、少女は鞭のからエネルギー弾をかめがけて投げつける。しかしそれもまた、空へと飛び上がり消え去つてしまふ。ネフシユタンの少女はまたしても唇を噛むことになる。

見るとカバヤミーの口は閉じられている。あれがトリガーナのだろう。

「ならば、口の開く前に圧し切るまで！」

翼が走り出す。カバヤミーはあたりに鈍重でそのスピードを捉えきれずに甘んじて一刀を受けることになった。

大きくよろめきながらも、倒れはせず口を開きながら体制を立て直そうとするカバヤミー。

連撃をかければ倒すことはそう困難ではない。むしろトンボヤミーの方が戦力としていくらも恐怖だつた。

しかし、この時点では翼の中に違和感が生まれた。
何故この怪物はトンボヤミーを殺害したのか。何故トンボヤミーのようにメダルが飛び散らないのか。なぜ反撃してこないのか。

そもそも奴が自分から攻撃を仕掛けたのはトンボヤミーに対してだけだ。

イレギュラーに思考を搔き乱される。それは、戦場においてもつとも危険な行為であるというのに。

集中。集中しなければ！

翼が意識を統一しようとすると。しかし、そう一度もつれた頭はそう簡単には整わない。

・・・独力では。

「翼！しつかりしろ！」

その声は今の今までこの場には無かつた声だった。そして、翼を包み込む何よりも温かい声だった。

その一声は翼にとつて何よりも有効な気付けになつた。

「奏！」

「戸惑うな!! 私達が取り戻すべきものはなんだ！」

カバの怪物は攻撃してこない。仮に敵対する意思がないのなら無視すべき。敵対の意思があるとしても何をしてくるかわからない以上警戒の他にどれの手はない。

ならば、第一に相手取るべきはネフシュタンの少女だつた。

「ええ！」

「ええ！じゃねえ。こんな逃げるに決まつてらあ。ほら！こいつは土産だ！」

ネフシュタンの少女は大量のノイズを放ち、逃走する。あのライブ程ではないにせよ、ここまで数が現れることはそうは無い。

足止めとしてはこれ以上のものは無いと認めざるを得ない。

「待て！」

「待てと言われて待つなら逃げるかよ！」

去つていく少女を追うことはできず、ノイズの対処に追われ、すべてのノイズが片付く頃には三人の装者とカバヤミーだけが残つていた。

そしてそのカバヤミーすら、たつた一枚のメダルを残して消滅してしまつた。

「奏さん！」

「響、大丈夫だつたか？」

「はい！それよりあのカバの怪物も…」

「ああ、奪われたネフシュタンも現れたんだ。いろいろ整理する時が来たのかもね」カバヤミーの遺した一枚のメダルを見つめる奏の眼はひどく鋭かつた。

「クソつ！ガメルのやつ、」

ウヴァは自分のヤミーが倒されたことを察知すると舌打ちを漏らす。

「どうしたんですか？」

背後からの声。目の前の怪人に声をかけたのは一人の少女だった。

「いや、何でもない。それより世話をかけるな」

「平気です。話してみたら本当の悪い人じやあないってわかりましたから」

「本当にいいのか？お前の大切な親友に嘘をつくことになるんだぞ？」

「・・・・いいんです」

少女は唇を噛む。

「先に約束を破ったのは響だし。それに、この嘘は、大切な人を守るためだから…」

！」

秘密といたずらと隠し事

リディアン音楽院。未来と響は二人、座っていた。その間には微妙な空気が流れている。

理由は明白。つい先日の事、大切な二人の約束を響が破つた事だ。
そして、未来の側にも後ろめたいものがある。

「ねえ、響」

「なあに？ 未来」

「私ね、昨日の晩にね、響に隠し事が出来ちゃつたんだ」

「え…？」

二人の間に嘘は無し。隠し事は無し。そのはずだつた。

しかし響にはその告白を責めることなどできるはずもない。

「…怒らないの」

「あ、いや、その…」

「怒つて、くれないんだね」

「未来…」

座っていたベンチから立ち上がり、未来は数歩進む。そして振り返ると顔に笑顔を浮かべていた。

「でもね、私きつといつか響に打ち明けるから……」

少し歪な笑顔を無理してつくっているのが、見ていて痛々しい。

「だからね、：：響も、今は響のやるべきことを頑張つて！」

「未来、！うん、：：うん！ごめん未来。私もいつか未来に全部言うから！だから！」

「響」

未来が優しい声で響の手を取る。

「響は響のままでいてね」

「私のまま……？」

二年前の事を思い出す。響の命を救つたのはグリードとツヴァイウイングだつた。グリードがいなければ奏は危険な状況だつたと記憶している。

響のために奏を危険に晒したと記憶している。

あの夜のことを思い出す。未来との約束を反故にしたあの夜。シンフォギアを纏つていながら、響は何一つ役に立たなかつた。

奏が流れを変えなければ、どうなつていたか分からない。

自分のまま、では居られない。弱い自分のままじや駄目だ。

そう思つていた。

なのに。大切な人は自分のまでいて欲しいという。

「響が今、何をしてるのかは分からない。でも、きっとみんなのためなんだと思う。響は優しいから」

「ツ……」

「だからね。響は響のまま、強くなつて。優しい響の今まで。響が響じやなくなつちやうなんて、私嫌だよ」

ハツとする思いだつた。

強くなるには、今のままじゃいけない。このままじやシンフオギアを纏つた意味がない。

けれど、それは自分を変えることは必ずしも意義を同じくしない。

私には守りたいものがある。だからこそ。

「私は私のまま、強くなる！」

そう響が決心したところで、背後からひょこりと日津洋が頭を出した。

「何の話？」

「うわあ!? 洋！もー、びっくりしたよお」

「ごめんなさいね。ところで、ちょっと置つてくれないかしら」

ゴソゴソとベンチ裏の茂みに身を隠す。なんだろうと思つて二人が首を傾げていると、奏が走つて來た。

「響！」

「奏さん？」

「今ここに洋が来なかつた!？」

匿つて、とはそういう事。つまり奏に見つからないようにしてほしいのだろう。どうしようかと戸惑つていると、未来が明後日の方向を指差す。

「洋なら、あつちに行きましたよ?」

「サンキユ！」

そこが良いところでもあるのだが、身内を信じて疑わないのが今回は裏目に出た。

奏の姿が見えなくなるのを確認すると、茂みから洋が出てくる。あまり大きな茂みではないが、器用に隠れたもので、出てくるまでまるで姿が見えなかつた。

「ふう。ありがとう、二人とも」

「もう。なんで追われてたの?」

「分からぬわよ。こつちに帰つてくるなり追いかけ回されて。あんな顔で追いかけられたら誰だつて逃げるでしょう?」

「そ、そうかなあ……」

服についた木の葉を払いながら、ベンチの空いているスペースに座る。

「疲れたわ。ようやく落ち着ける」

「何か怒らせることしたんでしょ？」

「心当たりが無いのよね。私の留守中に何か？」

「なんだろう……。あ」

何かに思い当たつたのだろう。響が声を出す。

「どうしたの？」

「いやあ。ここではちよつとお、えへへへへ」

響が気にしているのは未来の存在。二課絡みの問題は未来の前では話せない。

「何かいたずらがバレた訳では無いのね？」

「多分。っていうか、何かいたずらしてるの!?」

素つ頓狂な声を出す響。横では未来も驚いている。

全校生徒の憧れツヴァイウイングの片翼である天羽奏にいたずらをしていると平然と言つてのけるのは流石というべきか。

「そりやあね。あんな事やこんな事を、何を見ているのかしら？」

響と未来。二人の目線が洋からズれていた。

正確に描写するならば洋の目線よりも上。横にはほとんど動かず上に。頭を越え、更

に上。

座っている洋の座高を越え、立った人の顔辺りまで目線が持ち上がっていた。

「ほーう？一体どんなことをしたのかなあ？」

「例えばこつそり日記を盗んで読んでみたり」

「うんうん。他には？」

「部屋にジャミングの機械を置いてみたり？」

「たまに携帯使えなくなるのはそのせいだつたのかー」

「さて、」

振り向きもしないままベンチから立ち上がり、走り出す。

「待て！」

あの距離。あれは逃げ切れないだろうなと分かる。

それでもわざわざ罪を重ねた直後に捕まるわけには行かない意志の現れか、火事場の

馬鹿力を發揮して走る洋。

少しづつ二人の差が縮まりながら、その姿はどこかへと消える。

「何だつたんだろう？」

「あつははー。私もわかんない」

あとほんの少し。あとほんの少しで手が届くところで曲がり角を迎え、洋に続いて奏がカーブする。

F-1顔負けの音を鳴らし身体を90度回転させたところで、学院の用務員である伊達明に衝突する。

衝撃で我に返るとうまい具合に誘い込まれていたことに気がついた。
この先は行き止まり。しかし視界に入った洋には焦る様子がない。そして待つてましたと言わんばかりの表情を浮かべる伊達。

「悪いね、奏ちゃん」

足にゾツとするような感覚が走る。何かが巻き付いた。

見れば、金属光沢を持つた蛇のようななかだつた。

「蛇？」

「デンキウナギ。変な事をすると、ビリビリ!!ってするから、気をつけて」
伊達の言葉で奏は身體を強張らせた。

「それじゃあ、教えてもらうわ。最近の私を追いかけていたのは何故？」

優位を確保した洋が尋ねる。

「ある男に関してだ。聞きたいことがある」

「続けて」

ある男。それだけでは何のことだか、流石に判断がつかない。洋はその先を促した。

「駄菓子を持つた男。見た目と反してまるで精神が子供のようだつた」「それで？」

「知り合いか？」

单刀直入に、なんの婉曲も無く。率直に尋ねる。

「ええ」

「どんな関係だ？」

「ただの友人よ。それがなあに？」

「前に洋といいる所を見かけてね。あんたにも男の影があつたんだつてその時は実は嬉しかつたんだ」

「それで？」

「あいつはグリードだ」

「知ってるわ」

察していた。きっと洋はその事実を認識していると分かつていた。
問題はその先。つまり、

「もう一度聞く。アレとどういう関係だ」

一般に、世間的に、グリードは人類の敵ではない。ガラの一件以降、その存在を不安視する声もあるが大勢はグリードを英雄的に扱つてゐる。

しかし、二課関係者にとつて彼らは紛うこと無き敵だつた。

彼らの目的は不明。しかし、ウヴァを始め殆どが装者に攻撃を仕掛ける傾向にある。ガラ戦にて確認された赤グリードと青年。二課が存在を認知している内、彼ら以外はシンフォギアとの交戦経験がある。

そんなグリードが正体であると知りながら接触している洋。その立場は一体どこにあるのか。

事と次第によつては、二年もの間親しくしてきた彼女と敵対することになる。

「答えてくれ。洋。洋と、あの灰色のグリード。一体どんな……！」

「何でもないわ」

取り繕うのも面倒だとばかりにため息混じりの返答があつた。

「何でもないのよ。ガメルは」

「ガメル……」

「グリードについて知りたいんでしよう？それなら、その男に聞いてみるといいわ」

洋が指さしたのは伊達だつた。ゴリラ型のオモチャで遊んでいた伊達は、自分が指されているのに気が付き、ゴリラを缶の形に折りたたむとこちらに向き直る。

「俺の番か。さ、どんどん聞いていやつて！おじさん、なんだつて答えいやうから」「おっさん。あんたにも聞きたいことは山程あるんだ。あんた一体何者だ？」

待つてました。そう顔に書いているかのようにわかりやすく、伊達は名乗りを上げる。

「俺は伊達明。またの名を仮面ライダーバース。しかしてその正体は！」

伊達の身体が変質する。イカした中年男性出会つたはずの伊達。その姿が、崩れていく。

やがてそれは人型のシルエットを持つたメダルの山へと成り果てる。

よく見れば、銀色のメダルの中に数枚、淡い光を放つメダルがあつた。

やがて、人の姿からメダルの塊になる過程を逆再生するよう、肉体が生成される。しかし、出来上がつたのは人ではなかつた。現れたのはピンクの怪物。

長い一対の触覚を頭に持ち、手には巨大な肘から巨大な鋏が伸びる。足の先は鋭く尖り、先端に向かうに連れてピンクから紫へと色が変わつてゐる。肌は硬い甲殻に覆われ、鎧のようだ。

「その正体は、グリードだ」

ご報告

オーブ公式側での動きがあまりに大きすぎて且つ楽しみすぎてしようがないので、ひとまずこの話は放置します。

そしてオーブの続きを見終わつたあと今の設定のまま突つ走るか、一からやり直すか、それとも途中から新設定を反映させていくか決めるので少し待ってください。

多分そこまでこの作品を待望している人はいないはずなので、というかこの駄作を読んでくれている方はきっと仮面ライダーオーブが好きだと思うのでこんなものよりあつちを待望にしていてください。その後この作品が再始動したときちょっとでも楽しんでもらえたらと思います。

駄作者はオーブが一番好きな仮面ライダーシリーズなもので新作が出ると聞いて嬉しくてたまらなかつたです。しかもオーブだけでなくベースにも新形態が出るんですけどつて。

味方陣営は早い段階からありましたけどグリードもオリジナルキャスト勢揃いの発表がありましてガメル好きの私はもう死んでもいいのでは?と。流石に作品 자체を見ずに死ぬわけには行かないからとなんとか命を繋いでいるほどです。

もし今の私にセルメダルを投げ入れたのならきっと立派なグリードが生まれることでしょう。

さて、しばらく更新が止まることになりますが、更新しないと宣言するのは黙つて消えていくのよりも何だか釈然としない気持ちがあります。そこでお詫びというほどではないですが、いくつかこれまでの話の中で公開していなかつた気がする裏設定とまではいかない（多分）補足をしてみようかと思います。

まず第一に目津洋がメズールだということはいいでしよう。これが中々の曲者でオリキヤラのつもりも無ければ、ましてやオリジナル主人公のつもりなどまるで無かつたのです。しかし、悲しい哉、ハーメルンさんの方からご注意を受けまして不承不承ながらタグが追加されてしまいました。

個人的にオリ主というものが少し苦手なのでそのタグはつけたくなかつたのですが、致し方なしです。

ちなみに名前ですが、メズール→メヅ・ウール→目津・羊→目津洋という雑な名付けです。

次にガメルがいない理由です。これは詳しくは言わないですがアメリカにいます。まあ、大体わかりますね。はい。

一つだけ言うとすれば私はあくまで創作側ではなく受け取る側です。せつかく異世界からの乱入を許したのだからストーリーとしての面白さよりも登場人物たちの幸せを追いたいんです。ありえる形があるなら、キャラクターには死んでほしくないんです。

喋りすぎですね。

次です。洋が二課にいる理由なんですが、シンフォギアに関する情報を得られるというのもあるにはあるんですけどそれ以上にツヴァイウイングがライブをする寸前にこつそり二人にメタルを入れておくと、ライブが終わる頃にはセルメダルがごつそり手に入るということに2年前の事件で気がついたからです。

潜り込み方は本編の未来さんに近いことを狙つてやつてます。つまり二人と仲良くなつた後事件に巻き込まれる形で二課の存在を知り、協力を申し出ています。

最後にグリードたちが表立つて暴れない理由ですが、簡単に言えば日野くんが怖いからです。オーズ、アンク、バースの三人がグリードを襲わない代わりにグリードは人間に外を与えることはしない的な条約が結ばれているとかそんな感じに考えて置いてもらえればいいです。

取り敢えずこんな具合で勘弁してもらえると幸いです。鴻上会長が出てくるもう一

つ書いている話が止まっているのも似たような事情があります。仮にそつちを読んでいる人がいれば堪忍を。

ところで、別の新しい話を書きたいのだけどいいかな？ 実際やるかは別として、候補が三つ。

- ・艦これ提督の日常的な奴
- ・ウルトラ宇宙人幻想入り
- ・F a t e / G r a n d O r d e r ×ウルトラマン

世代がばれますね。もし少しでも興味あるよつて人がいたなら教えてくれるとやるかもです。いなくてもやるかもです。

今後の方針 ※ネタバレを含みます

復活のコアメダル見てきました。内容は少し残念でしたが、仕方ありません。キャラクターデザインが素晴らしかったですね。大好きな串田アキラさんの声もたくさん聞けて満足です。

さて、今後についてです。今のストーリーを続けていくのも検討したのですが、せつかく新キャラや新メダルがあるということでいっそ最初から書き直すこととします。

というのも、映画の内容は私からすると少し不満が残るものでした。あのまま終わらせてしまうのは勿体ない。シンフォギアの世界で存分に活躍してもらおうと思います。現行のストーリーについてはここで辞めてしまうのも浮かばないので、気が向いたときに幕間として更新することを考えています。

まだあまり内容を考えてはいませんが現段階での構想を少しだけ。

旧作では群像劇的に描くはずだつた中、メズールに偽名を使つたことでオリ主タグを追加されるという珍事が発生しました。怒りが収まらないので今度は完全なオリキャラを登場させてしまおうかと。

あまり自作オリジナルは好きではないのでやりたくないのが本心ですが、該当キャラクターはこのままだと少し描き難いものがあります。

そのキャラクターとは800年前の王です。結局なんだつたのかよくわからないので人格の設定が非常に難しいのですよね。

これをオリキャラにして主人公として扱うのが一つの案です。

もう一つ案はあります、それは王を全く無視してしまうことです。パワーバランス的にも王は扱いにくいので登場させないというのを考えています。

あと、あの王ってオーズなんで出ないって断言したのが嘘になってしまふんですね。火野映司にも変身はさせていいというのにです。

以上二つの案があり、最終的な判断は私がしますが一応アンケートもかけてみようと思います。少数意見側になつたとしてもあしからず。

私の二次創作作品及び『仮面ライダーオーズ10th復活のコアメダル』に対する感想・意見お待ちしています！是非お気軽にコメントを！

最後に、連載再開はネタバレ回避の面も考え、映画の劇場公開が終了してからを予定しています。楽しみにしてくださっている方には申し訳ありませんが、もうしばらくお待ち下さい。

最後と申しましたが、字数が足りないのでついでに証明。私は基本的にどんなキャラクターも死なせたくない（死なすために用意したオリキヤラを除く）のでシリアルスな作品が好きな方は少々物足りなく感じるかもしませんが、勘弁していただけるとありがたいです。

現行1 グリードとノイズと再始動

今や日本一メジャーと言つて差し支えのないアイドルユニット「ツヴァイウイング」のライブの開始まで一時間をきつた。

このライブは『認定特異災害』ノイズに対抗しうる唯一の戦力である、特異災害対策機動部二課による完全聖遺物の起動実験でもあつた。

二課の司令を務める風鳴弦十郎は二人の装者への激励を終え、舞台裏を歩いていた。彼の足が何かを蹴飛ばした感覚があつた。

「メダル…？」

金縁の緑のメダルが転がつていく。弦十郎はメダルをつまみ上げ、足を止めると少し観察する。

「これは…クワガタ…？」

メダルには両面に同じ模様があつた。どうやらクワガタのようだ。抽象的なクワガタは古代の壁画にでもありそうな具合だ。

(落とし物か？小道具という可能性も…。ともかく運営の方に届けねばな)
緑のメダルを胸ポケットにしまい、歩きだした。

「ねえ翼。これが何か分かるか？」

ツヴァイウイングの片翼、天羽奏が懷から二枚のメダルを取り出す。金縁、そしてそれぞれ赤と黄のメダルだった。

「これ…どうしたの？」

「よくわかんないんだけどさ、いつの間にかポケットに入つてたんだよね」

「実は…」

翼が懐へ手を潜らせる。取り出された物はまたもメダルだった。翼の物もやはり金縁、しかし模様と色が違つた。一枚は赤で奏のものとも似ていた。しかしもう一枚は青。描かれている模様も全く違つた。

「これは、タコかな？」

「うん、そうみたい。奏のは猫？」

「うーん、猫よりはトラつて気がするな。こつちの赤いのも微妙に違うんだね」

「本当だ。同じ鳥かと思つた」

「でもこれ、何だろうね」

「わからない。でも、なんだかとても温かい。まるで不死鳥が抱きしめているみたいだ」

「あはは。それは縁起がいいや。誰のかわからぬけど、それならもう少しだけ借りておこうかな」

「フォニックゲインの上昇、想定範囲内。順調です」

「成功みたいね」

「……」

「どうかした?」

「ん!ああ、すまない。このまま観察を続けてくれ」

ライブが始まり、会場は盛り上がりを見せていく。そんな中、風鳴弦十郎は緑のメダルが気になつて仕方がなかつた。

(どうもこれはただのメダルとは異なる氣を感じる…聖遺物では無いだろうが…)

ポケットの中でなんとなく手遊びしていると、つい誤つてメダルを床へ落としてしまつた。メダルは結構なスピードで転がっていく。

弦十郎はメダルを拾おうと、モニターに背を向けた。

『コンサート会場内にノイズ出現! 一般人に被害が出ています!』

『何だとおつ!?』

慌てて振り向くと、モニターでは人類を殺す災害が猛威を振るう。ノイズは触れた人間とともに炭化していく。被害はまたたく間に拡大していった。

「避難誘導を急げ！」

観客たちは我先にと逃げ出そうとするも、その無秩序がさらなる被害を誘発する。

少女は立ち尽くしていた。眼の前の光景はどこか現実離れしていて、目を離すことがかなわない。

つい先程までは煌めくライトに照らされた観客たちが熱狂を演じていて、それなのに今では灰と瓦礫と銀のメダルだけが静かに散乱していた。

そんなどうしようもない絶望の中に「歌」が聴こえた。

二人の戦姫がノイズを斬り裂いていく。ノイズを貫いていく。間違いない、あれはツヴァイアイウイングだ。

少女が惹かれたのか、あるいは彼女の懷に紛れたタカのメダルに導かれたのか。少女、立花響は無意識にツヴァイアイウイングのいるステージへと足を運んでいく。「何してる！早く逃げろ！」

いち早く響に気づいた奏が駆け寄る。その間にもノイズは容赦なく攻めたてる。

ノイズの群れが一斉に響を目指して特攻する。

「このつ！」

奏は彼女の槍を回転させ、ノイズをいなして響を庇う。しかし、無数のノイズを相手に守勢に回らされでは長くは持たない。

やがて奏の纏つたシンフォギアが限界を迎える。ヒビが入る。槍の欠片が飛ぶ。運の悪いことに、奏のガングニールの一欠片が呆然とする響の胸を穿つた。

「!?

傷は浅くない。もしこのまま放置してしまえば命はないだろう。奏はなんとかノイズの猛攻から逃げ出し、響を抱えて瓦礫の影へと避難する。

この弾みで、奏の持っていた赤いメダルが転がり落ちた。

『俺のメダルだ！』

失神しているはずの響から声がした。見た目からは想像し難い男性的な声だった。

見れば響のポケットから見覚えのあるメダルが覗いていた。メダルは意思を持つているかのように不可解な動きでポケットを飛び出すと奏の落としたメダルに接する。すると、ライブ会場に散らばっている銀のメダルの数枚が二枚のメダルに引き寄せられた。

「これは…？」

銀のメダルは赤いメダルを中心には塊となり、何らかの形を作っていく。メダルの塊は人型になり、メダルとしての姿も失っていく。黒いミイラのような身体に鳥のレリーフを持つた赤い頭。人のようで人でない何かが現れた。

「……は…どこだ？」

怪人はひどく戸惑っているようだつた。

「お前！一体誰だ！」

奏は怪人に對して食い下がる。ノイズという問題を抱えた中、新たに現れた謎に對して悩んでいる時間はない。そんなことをしている間に怪我をした少女の死が近づいていく。

頭よりも先に動いていたというのが正しいかもしない。

「お前こそ誰だ！……はどこだ！」

怪人が怒鳴る。この声か先の奏の声か、どちらに反応したかはわからないが、ノイズたちがこちらに気がついてしまつたようだ。

「わかつた、説明は後でする！しばらく隠れていろ！」

隠れろと言わされて怪人をは鼻で笑う。

「隠れろだと？お前に命令される筋合いはない！」

怪人は腹を立てたか、スタスタと歩いていつてしまう。そしてその頭になぜか飛んできたノイズが激突した。

ノイズは炭となつて崩壊し、怪人の頭から血の代わりにメダルが数枚こぼれ落ちた。

怪人は慌ててメダルを拾い集める。

奏はついに響を見つけてしまったノイズの対応に追われていたが、その様子はしつかりと目に入れていた。

「そのメダルが必要なんだろ？あのノイズたちの居るところにたくさん落ちてるよ」言葉を投げかける。露骨な誘導だが、怪人は腹を立てつつも口車に乗ってしまう。それほどあのメダルが重要なのだろう。

怪人はブツブツとぼやきながらノイズの群れに向かつて走り出す。

手始めに響たちを狙うノイズを殴る。しかし、その拳はノイズの身体を風を切るようになり抜ける。

「何だ…？」

怪人、アンクを襲うノイズは衝突に合わせて崩れ去る。だというのにアンクが触ろうとすると目の前の謎の存在はすり抜けてしまう。

アンクはよく目を凝らす。敵の攻撃の瞬間、そしてこちらが触れる瞬間、何が違う。何かが違う。具体的な違い、それはわからない。

だが、触れられるときの状態は理解した。後は簡単だ。触れられるやつだけを触れら
れるときに倒せばいい。

「そこだ！」

破壊力を持つた暴風が一体のノイズを滅する。

同じ要領で確実にノイズを始末するアンクだが、アンクの攻撃できるノイズはそれで
も極わずかだ。

大型のノイズが産み出す新たなノイズに比べるとどうしても間に合わない。

「クソ！あいつが邪魔だ！」

「フン、ちまちまやっているからそういう事になるんだ」

「お前っ！」

緑の雷がノイズを突き抜ける。何体かは今の一撃で倒せたようだつた。

「ウヴァ！何していやがる！」

「さあな。実のところ俺もよくわかつていなが……こいつらは気に食わねえ。それだ
けだ」

「珍しく気が合うな。それで？この数をどうするつもりだ」

「当然、数には数だ」

新たに現れたウヴァは体内からメダルを大量に取り出し、二枚に割る。二つに割れた

セルメダルをウヴァアが投げ捨てるミイラのような怪物が現れ、ノイズに向かって歩き出す。

「屑ヤミー：相変わらずだな」

「役立つものは何だつて使う。行くぞ」

「ふん」

小型ノイズの相手を屑ヤミーに押しつけ、二人は大型ノイズに標準を定める。敵意に気づいたのか大型ノイズもまた二人を向く。

「セルメダルが心許ない。手早く済ますぞ」

アンクは翼を広げて高く飛び上がる。そしてノイズたちの頭上を飛び回る。

「そいつだ！」

「おう！」

アンクの指定したノイズを目掛けてウヴァアが電流を流す。タイミングさえ合えば大型ノイズといえど倒すには充分な威力がある。

大型ノイズの一体が灰になつて崩壊する。

「次だ！」

アンクがまたしても旋回を始めたところで、天から小さな剣の雨が降り注いだ。

「？」

剣は大型ノイズ達の身を削り、やがては塵に還してしまう。

「動くな！身柄を拘束する！」

この場に剣を携えたただ一人、風鳴翼が二体のグリードを牽制した。

「つまり、あなた達は金属生命体⋮つてことね？」

桜井了子は頭を搔く。自分の知識の外からの存在に困惑と興奮を覚えていた。

る

「了子くん、これはもしかすると…」

「ええ、彼らに位相差障壁を無効化する手段を持たせることができればシンフォギア

に次ぐ第二の戦力とできるかも知れないわね」

ツヴァイウイングのライブの惨劇から二年。様々な社会的混乱を生みながらも、徐々にその影は薄れつつあつた。

身体的・精神的疲労を理由にアイドル活動を休止していた天羽奏も復帰を表明していく。世間は翼・奏両翼揃つたツヴァイウイングの復活に期待していた。

そんなご時世に、あるツヴァイウイングファンの少女が憧れの彼女らの所属するリディアン音楽院に入学した。

立花響は親友の小日向未来と歓談していた。

「どうしたの？何だかとても嬉しそうじゃない」

「ええ？わかっちゃう？ツヴァイウイングのコンサートが決定したんだ」

「響は本当に二人が好きなんだね」

「もちろん！だつて命の恩人だよ？」

「はいはい」

幸せそうに白米を口へ運ぶ響、口元に米粒がついてしまうのもお構いなしだ。

「どうしたんだろう？何だか騒がしいね」

ざわざわと食堂が賑やかだ。普段とは違う盛り上がり方をしていて、姦しさの渦が移動する様子は台風のようだ。

台風はやがて響の真後ろまでやつてきた。台風の目が姿を表し、未来、そして響の目に入る。

「奏さん!?」

ばつと立ち上がる響。緊張からかそれきり固まってしまった。

そんな不審な挙動をした響に、驚きつつも奏が気付く。

「口元、お弁当が付いてるよ、どこにいくつて言うのかな?」

「へ?あ…」

みるみるうちに響の顔が青ざめていく。放課後になつても響のショックは止むことはなかつた。

「もうダメだ…完璧変な子と思われたよ…」

「間違つて無いんだからいいんじやないの?」

響は未来が今日の授業をノートにまとめている様子を眺めている。

「それ、まだ終わらない?」

「うん。あ、そつか、今日は翼さんのCDの発売日だつけ。でも、今どきCD?」

「うるさいなあ、特典が違うんだよCDは」

「だとしたら、売り切れちゃうんじやない?」

「うえ!?

響は走っていた。翼の新しいCDを買うために。息継ぎをリズムに合わせて「CD♪」などと口ずさみながら走っていた。

しかし、目指していた音楽ショップのある角に着いた頃、ある異変に気がついた。周囲に人がいない。

路上には灰が積もっている。灰の中からは銀色のメダルが数枚ちらついている。

数年前からのメダル混入については別として、この現象は初等教育の段階から教わっている。さらには、響にはこの現象に対しても人一倍敏感にならざるを得ない過去がある。

血の気が引き、冷や汗が湧き出る感覚があつた。

「ノイズ……！」

第11話

街中でのノイズの発生に、特異災害対策機動部二課の面々は慌ただしく動いていた。特に二年前の事件での負担がようやく回復した奏を心配する声が多い。

「奏、大丈夫? ここは私達だけでどうとでもなるから…」

「大丈夫だつて。それにもしやバくてもさ、あんたが助けてくれるだろ?」

「それは…! そうだけど…」

心配する翼達をよそに奏は柔軟体操をしてみせる。

「奏」

表示されたモニターを見つめていた風鳴弦十郎が背を向けたまま声をかける。

「なんだい旦那」

「無理はするなよ」

神妙な面持ちの弦十郎に、奏は飄々と笑つて返す。掴みどころの無い具合はかつてから変わらず、空を舞う羽毛のようだ。

「わかってるつて。死んでも生きて帰つてくるよ」

管制室のドアが開く音がする。カツカツとヒールの音が響き、姿を見せたのは稀代の

大天才桜井了子だつた。

今になつて現れた了子が奏の肩に手を乗せる。こんなタイミングになつたにも彼女なりの事情というものがある。

「ギア、リンカー共に最終調整完了。いつでも行けるわ。頑張つてね」
「ああ」

奏出陣の用意が整い、この後の段取りを弦十郎が説明する。

「既に出撃しているアンクくんと合流、上空からの死角の状況を合図する。また、逃げ遅れた住民を発見した場合は場を翼に任せ人命救助を優先すること。それから、あくまで时限式、リンカーの持続時間が近づき次第帰つてくること。いいな」

「了解！ 翼、いくよ！」

「うん！」

二人がノイズの発生現場に到着するとすでにアンクがノイズの殲滅にあたつていた。

アンクは上空から二人の姿を視認すると指示を飛ばす。

「向こうにガキが一人逃げ遅れてる！お前らでなんとかしろ！」

アンクの指差す方向にはやはりノイズの群れがいる。

「急げ！まだ間に合う！」

アンクは人間ではない。タカを象つた彼の頭部は規格外の視力を持つ。きっと今もまだ彼の目には二人の姿が見えているのだろう。

であれば希望はある。

「行こう、アンクの翼は出突つ張り。今羽撃けるのは私達だけだ」

「うん、奏。…………久方ぶりに両翼揃い、ツヴァイウイングいざ参る！」

奏の槍が道を指し示し、翼の剣が切り開く。実践での共闘は実に二年ぶりとなる。しかし二人の切れ味に一切に刃こぼれはない。

辺りを覆い尽くさんばかりのノイズの視線がアイドルに向けられる。

「へつ、2年待つても観客の面は変わらないもんだね」

「奏、軽口は後。リンカーはまだ時限式なんだから、終わらせましょう」

「そうだな、あんまりせつかちなのは好みじやないけどのんびりする暇もないか。よし、行くぞ！」

歌が流れる。

二歩三歩と駆け出した奏は五歩目と六歩目をどちらも右脚で跳ねるように進むと左脚の着地とともに手にした撃槍・ガンギニールをぶん投げる。ガンギニールは奏の手を離れ3メートルの位置で二本に分裂、さらに6メートルの位置で四本に分裂、9メート

ルの位置で八本と次第に数え得ない数の光槍となつてノイズたちの頭やら足やら何もかもを貫いていく。

「まだまだ！」

アスファルトを悲惨と同情するほどに立派な立ち姿を飾るガングニールの本体を拾い上げると再び投げの体制を取る。既にガングニールは変形を開始している。

「翼！」

「ええ！」

多数の溝を持ちつつ、槍としては無愛想なほど極太に傘を広げたガングニールが回転する。独楽と呼ぶべきかドリルと呼ぶべきか、錐揉みするガングニールだが、それで終わる地味な技など披露する価値もない。

背後から走り迫る翼が、奏の肩を踏み台に飛び上がる。ガングニールの直上まで跳ね上がると無数の小刀に姿を変えたアメノハバキリが降り注ぐ。

小刀はギャングニールのドリルに巻き取られ不規則な角度、不規則な拍子、不規則な威力に飛び散る。ギャングニールの溝に絡まつたアメノハバキリは揃つて刃を外に向けよう凶悪な破壊力を持つた掘削機へとギャングニールを変貌させる。

立体的な破滅を可能とする廻殺兵器の前にあらゆる型のノイズが泡のようにかき消えてしまう。

やがて大型ノイズの腹を貫いたことで掘削機は役割を終える。

逃げ惑う少女たちを脅かす脅威は晴れて消え去った。

「お姉ちゃん達、だれ？」

「もう大丈夫だ。ん？」

二人の少女、その年のいつた方と見つめ合う奏。

「避難中の民間人と合流！アンク！他には!?」

「見える範囲で生きるのはそいつらだけだ！残りを殲滅するぞ！」

「奏、安全なところへ。残るは私たちで処理できる」

「ん…？あ、ああ！頼んだ。翼」

翼の声が気付けになり、臨戦態勢に持ち直すた奏は、避難者を囮うように分裂させたガングニールを突き立てる。

一方で翼と、そして空を飛ぶノイズを処理しきつたアンクが速やかに町中をうろついているはぐれノイズを駆除、大きな問題もなく今回のノイズ災害は幕を閉じた。

しかし、ノイズの殲滅が完了すると程なく第二戦が開幕するのが恒例行事となつていた。どうもノイズを意図的に発現させていると推察される緑ジャケットの男が戦地の中心に立っていた。

「ウヴァ、やつぱりきたな！」

「アンク：なぜ解らない、お前はもつと賢いはずだ」

「毎度毎度同じやり取りが必要か？いや、虫頭じや前の会話も忘れちまうのか？」

「フン……」

ウヴァアが屑ヤミーを生み出す。先程までのノイズほどではないにせよなかなかの量だ。

「いけ！」

ウヴァアの号令で屑ヤミーは散会する。アンクが屑ヤミーを目掛けて火球を飛ばすも、ウヴァアが阻止する。

ウヴァアの反撃をアンクがいなす。

「邪魔はさせん。ただでさえ頭数では不利なんだ。これぐらいは使わせてもらう」
ウヴァアの言葉にアンクが笑う。

「不利なのは人數だけか？」

「黙れ！一枚程度ならばセルメダルが充分あれば……！」

怒りにまかせてウヴァアが角から電撃を走らせる。酷く乱雑な攻撃だがそれだけに回避は不可能に近い。仕方なく真っ向から受け切ることになる。

防御そのものはそう難しいことではない。炎を渦巻かせた暴風がアンクを包み込み、電撃を受け流す。

小競り合いが続く。誰も止めはしない。実際この二人の戦いは小競り合いとしか呼びようの無いものだつた。互いに相手を倒し切るつもりなど無い。時間稼ぎに過ぎない。

二年前の事件以降炭化した人間やノイズの残骸から現れるようになつたセルメダル。それを拾い集めるための時間を少しでも優位にするために、互いが互いを牽制するというだけの小競り合いだつた。

アンクのもとに通信が入る。ほぼ同時にウヴァもなにかに気がついた様子だつた。

「アンク、お前がこちら側へ来るならば俺はお前を歓迎する。よく考えることだ」

「お前こそ頭を使え。いつだって利用され続けていたのにまだ気づかないのか」

二人は互いに攻撃をやめ、赤と緑の幕に隠れると姿を消した。

「あの！私、実は助けてもらつたのが二回目で！」

目撃者に対しても止めの説明をしていたところ、一人の少女がツヴァイウイングの人に向けて声を発した。

「ああ、覚えてるよ。二年前のライブを観に来てくれたよな」

「ちょっと奏！」

「良いじゃないか、ちょっとくらい。堅いこと言うなよ」

奏は少女の頭を撫でる。

「私、立花響といつて……で、ええと、あの……？」

「うん。生きててくれて本当にありがとうございます。きっと辛いこともたくさんあつただろう

？」「いや、えっと、でも、！」

緊張からか固まつてしまつている響だが、その目からは涙が流れ出した。溜まつていたなにかが奏の言葉によつて溢れ出たものだろう。奏は響のあたまに手を乗せる。そしてもう一方の腕で強く響を抱きしめる。

「奏さん！ 困ります！ 無関係の方とあまり親しくされてしまつては……」

響とともに逃げていた少女とその家族への説明を終えた緒川が歩み寄ってきた。

「無関係ね……そうでもないかも知れないよ？」

奏は響のポケットから一枚のメダルを取り出した。どこにいたのか目ざとく反応したのは勿論アンクだつた。

「俺のコアメダルだ！ お前！ どこでこれを……」

「二年前にも一枚持つっていたね。コアメダルの少女、気になるとは思わない？」

詰め寄るアンクと困惑する響を傍目に奏が話す。その言葉が向けられた相手は緒川

でも翼でも無く、この場にはいない人物だつた。

沈黙の後、緒川の懷に匿われた通信機から声が聴こえた。

『緒川、彼女をお連れしろ』

声の主は当然風鳴弦十郎ということになる。